

ハワイ日本文化センター 口述歴史インタビュー

話し手：金城秀夫 (HK)

聞き手：林 達巳 (TH)

実施日：2012年8月14日

転写者：脇 洋子

TH: 今日は2012年8月14日。丁度日本の終戦記念日という大変に記念すべき日にインタビューさせていただきます。では、宜しくお願いします。さいしょにお名前と生年月日、とお生まれになった場所、国籍を教えてください。

HK: 私はOctober 10、1921にBig Island ハワイ島のPaahauというところで生まれました。

TH: そうすると国籍はその時は。。。

HK: 国籍はハワイ島で生まれているから米国市民なんですね。

TH: 日本の国籍はその時お取りになりましたか？

HK: 二重国籍になっていたんだけど何時取ったかは分かりません。

TH: それでお名前の金城秀夫さんは金城、ひでは優秀の秀、それに夫と言う字ですね。

HK: はい。

TH: それではご両親のお名前と出身地は覚えていらっしゃいますか？

HK: 父の名前は金城かめ。母の名前は金城カマド。出身は糸満ですね。沖縄県糸満町。糸満町だったんですね昔は。今は市になっていますけど。父は久米島と言う所へ行ってそこで行商したり農業したりしていたんですね。で、兵隊検査があつてそれが済んでからハワイへ来て始めにマウイへ行って。マウイでは何やったか分からないけど。Big Islandへそれから渡ってそこではTaxi DriverとかねCoffee作り、黍の受け、どれもこれもあまり上手いかなかったみたいです。

TH: 分かりました。それではお母様のお名前はカマドさんですね。カマドさんもそれでは結婚されてから一緒に来られたのですね。

HK: 母の親父がうちの父に聞いて沖縄から呼び寄せて結婚させたと聞いています。

TH: はい。分かりました。それで今は金城さんのご家族ですね。お名前と今どこに住んでいらっしゃるのか教えていただけますか。まず奥様のお名前は？

HK: 妻は房子。今は金城ですがMaiden Nameは宮里。親達は沖縄県名護出身です。

TH: ご結婚なさったのは何時ですか？

HK: Nineteen Sixtyかな？ Sixtyかな？

TH: ではそれは又後で。それで金城さんはこちらでお生まれになって沖縄に行かれたないしは帰られたということですがそれは何時頃のことですか？

HK: 僕が生まれたのがNineteen Twenty Oneだから、Twenty TwoかTwenty Threeの頃ね、まる一歳ぐらいの時。

TH: それは沖縄のどちらですか？

HK: 今は糸満ですけどね、前はかねぐすく村だったんですね。

- TH: 兼のほうですか？
- HK: 兼ねるという字です。ぐすくは城です。
- TH: 村ですね。で今は糸満になってるわけですね。
- HK: 今は糸満。
- TH: お帰りになったのには何か理由があったのですか？
- HK: やはり父の仕事があまり良くないんで、家族は病気がちで病院通いで手に負えないで。それに僕達に日本教育を受けさせたいというような考えもあったみたいですね。
- TH: それでその時はご一家が皆お帰りになったのですか？
- HK: いや。父親だけは残ったのです。
- TH: そうですか。お父様はこちらにお残りになって。それでかなぐすく村に行かれてその後ずっと生活されていたのですね。
- HK: あれから母は台湾に行って、僕ら兄と二人連れて台湾へ行って。それで僕が小学校 2 年生の時に母もやっぱり生活出来なかったのでしょうね。叔父を頼って叔父の家から小学校いったんです。母は台湾に残って。
- TH: それで沖縄での学校はどの辺まで受けられたのですか？
- HK: あの糸満小学校、尋常高等小学校とあってね。そこで僕は高等科 2 年まで、8 年生ですね。
- TH: それでそこまで行かれた訳ですね。
- HK: はい。8 年生。
- TH: 何かその当時の思い出、苦しかった事も楽しかった事もあると思いますが。
- HK: ええ。あの頃はね。沖縄はとっても貧乏だったんですよ。それで皆お金の事であくせくしてるし叔父叔母も僕らも口減らしのためにうんと働かされてもう奴隷みたいに使われました。学習なんてろくろくさせてもらえなかったですね。
- TH: と言う事はあまり良い思い出は。。
- HK: 良い思い出はぜんぜん無いです。すごくひどい目にあいました。
- TH: 無いですか。それは大変でしたね。それでハワイには何時おかえりになったのですか？
- HK: Nineteen Thirty Eight の 2 月 21 日かな。Washington 大統領のバースデーで 22 日で前の日だったからそれで一日余計に移民局に閉じ込められちゃった。
- TH: その時はお一人でこちらにお戻りになったのですか？
- HK: あの、兄と。
- TH: お兄様と。何と言う方ですか？
- HK: けんいち。賢い一。
- TH: はい。
- HK: で、僕はあまり小さいものだからね。こき使われてたし、食べ物が悪いしね。17 歳ぐらいになってたのね。なってるのに **Seventy-seven pound**. 小っちゃいからこれは替え玉じゃないかと絞られてでもしまいには出してくれました。一日か二日余計にとめられました。
- TH: あれですか。それで結局入国許されてどこにお住まいになりましたか。
- HK: こんどは父は漁師をしてたからね。一週間海へ出でたら一週間戻って。叔父、母の弟、はるお、はるお金城。彼はちょっと盆栽で有名ですよ。
- TH: 弟さんがそこに居られたのですか？
- HK: お父さんは海から帰ったら魚なんか持ってきておった。それで叔父の家から英語習いに行った。

TH: ああそうですか。それで学校の名前覚えていらっしゃいますか？

HK: ハワイ中央学園。ヌウアヌ、今の Foster Garden ですね。

TH: 中山先生なんて言う方がおられたのを。。

HK: 私が居る時は、中山先生はなかったですね。

TH: なかったですか。

HK: 英語の先生はロシア系の人で。ロサウスキー。(それから) お婆ちゃんが校長先生だったかな。すえひろ。

TH: すえひろさん。それでそこで英語を学ばれて。それからお仕事につかれた訳ですか？

HK: まあ、皿洗いなんかしながら。しながら学校行ってました。確か 12 時まで、学校は。朝だけで。それで午後から仕事して。皿洗いなんかして。

TH: では大変に辛い思いをして。

HK: そうですよ。小遣いなんて貰えなかったからね。その頃バス代が 5 セント、大人だとトーキングが二つで 15 セント。で 10 セント行きのバスと帰りのバスの 10 セントと貰って帰りはアイスクリームを買って食べて、5 セントで買って食べて後は歩いて帰った。(笑い)

TH: どこまでですか？

HK: カカアコ。(笑い)

TH: カカアコですか。そうこうしている内に戦争が始まるとこういう事ですか？
その真珠湾攻撃の当日は何をなさっていらっしゃいました？

HK: 僕は午後から夜中までの仕事だったからね。で、日曜日で朝、父も海から帰ってきてそれから同居していたうえはらさんという方と三人でいたら、空でポコンポコンと高射砲の弾のはじける音がするから見たら。父は何時も高射砲の演習をみてるから。弾けるとときには白い煙だった。その日は黒い煙だった。これは実弾だよと父はいった。

TH: それはカカアコから見ていた。

HK: これは実弾だよと言ってたのです。そうするうちに隣の人たちは何事だろうと思って屋根の上に上がって見てた。そしたら前のガラーズのトタンにパラーとシャペネル、大砲の弾の、あれが落ちる音がして大急ぎで降りてきた。それでカカアコの僕らが住んでいたところと Times Grill、今は何かな。後 Columbia Inn になって。

TH: Kapiolani にあった。

HK: そこで働いていたから。歩いて行ったら、号外。Pearl Harbor Attack !

で、夜は blackout。だから昼だけしか仕事できない。で人数は夜と昼の人数がいるでしょ。だから半日。半日しか仕事貰えなかった。

で、そうこうしている内に、そこを辞めて、叔父の brother-in-law の所、downtown の小さいレストラン(註 : Black Cat Café)をやってて、叔父の brother-in-law は大学出で cook なんか知らないから僕にやってくれ言って。それでやっていた。それであん時蓄膿症があつてね。Doctor 行ったらお前水を使う仕事するなと言うから、丁度その時 Wilson Cooke? の lumberyard の仕事があつたのであつちなら水使わなくていいし、手間も良いからそこにしようと思って、僕と同じ年沖繩から来た金城けいいちと言う人、彼も cook を少し分りよつたから“あんた僕の代わりやってくれ”言うような事で彼に譲って僕は lumberyard へ。そこから引張られちゃった。あんなとこ働いたら defense work の人と関係があつたのね。それもあつたんだろうと思いますが。

TH: という事は、拘置されたのは何日目ですか？ 当日ですか？

- HK: No, もう何ヶ月か。
- TH: ああ、そうですか。年が明けてからですか。真珠湾攻撃は12月7日でしょ。それで捕まったのは年が明けてから。
- HK: 明けてから。
- TH: そうですか。
- HK: 皆さんあの頃は軍事景気みたいであちこち defense work でカフクなんか行ったんですよ。良い手間があるから。行ったけど、友達が連れていってくれたんだけど雇って貰えなかったんだね。あんなどこ行ったのも悪かったかもしれない。
- TH: じゃあ、本当にとんだ事でつかまってしまった訳ですね。
- HK: まあそれも一因だったでしょうけど、学校も尋常を卒業したらこんど高等科でしょ。教練があるんです。教練。鉄砲担いで。じゃあ、あれもあったと思うんです。
- TH: その辺でそうとう捕まったひとありますね。
- HK: まあ兄は6年生ですぐ仕事にやらされて叔父の力になれと言われて又従兄の大きな病院持っていたのでそこで仕事を貰ってだから引っ張られなかったんです。
- TH: そうすると逮捕されてどこに連れて行かれたんですか？
- HK: 始めは移民局。移民局に一週間ぐらい居たんじゃないかな。
- TH: それから Sand Island ですか。
- HK: Sand Island。で investigation は FBI. Dillingham Bldg.で。
- TH: FBI のオフィスが あったみたいですね。それで行って investigation を受けたわけですか。
- HK: あってそれから家帰されて。2 辺目又呼び出されて。2 辺目には家帰さないでそのまま Sand Island へ。あの頃は船で小さい栈橋があつてね。
- TH: それで immigration のオフィスに閉じ込められていた時は何人ぐらいの人がいたか覚えていらっしゃいますか？
- HK: えーと、小さな中庭にいたから、20人近くぐらいじゃないかと思いますが。
- TH: それで Sand Island に移された時は何人ぐらい他の人が居たか覚えていらっしゃいますか？
- HK: 人数は覚えていないけどね、バラックが、大きなバラック、2階立てのバラックが3つ在って一階に40人ぐらいいて2階に80人くらい。200人位かな、200人か250人くらい居たんじゃないかな。
- TH: なるほど。それでその当時はは知ってる方も入って居られて話をしたり、そういう事は出来ました？
- HK: さあ知ってる人。皆仲間だからね。沖縄からの人たちも沢山居ました。坊さん。つは。
(註: 津波憲実開教師) たいらこうたろう (註: 平良孝太郎)。ドクターいくた (註: 生田ケイ俊治医師) なんかいいたね。おうどうさんという方 (註: 王堂俊一。日本語学校教師)。
山口県や広島県の人が多かったみたいですね。山口県は漁師が Pearl Harbor 出たでしょ。あれでだと思いますよ。だからだいたい山口の言葉や広島のを覚えました。
- TH: 何か Sand Island と Immigration Office でいまだに忘れられない思い出がありますか？
- HK: えーと。Sand Island では砂を掘ると貝がたくさん。貝を砥石がないからセメントでこすって。レイを作ったり。暇があるとね。いろいろそんな事もして。まあ英語の勉強も教えてくれる人がいて。一番の思い出は Prisoner of War。営倉に入れられて、バラックがあつて。朝起きるともう隊長が出て、隊長が出ると後に兵士が皆続いて。教練に出るわけね。最初に皇居に向かって最敬礼。それから何かでガードが拳銃で何しても。“はい、はい。殺してく

- ださい”。そんな、で、大きな声で、向こうに話す事あると誰かが一人言でしゃべっていて。
- TH: あの、抑留された人達の間での会話というのは家族の事とかそんなような事が主だったんすか？
- HK: そうですね。会話ね。それからいろいろ演芸会。むこうではあの何ていうか下品な事も皆よくやっていたですから。面白かったですよ。ドクター上原というのが XXX の長唄式。あれ浪曲であらわしてとつても下品な事も上品な事も。長唄とか上品なこともやっていました。
- TH: そうすると Sand Island におられたのはどの位長かったのか覚えていらっしゃいますか？
- HK: 覚えてないけど。拘束されていると随分長かったような気がするけど。人生みたいで長いような短いような。
- TH: Sand Island から Mainland へ移動されますよね。それは何時だか覚えていらっしゃいますか？
- HK: それかね、その移動するまでの長さがね分らないんです。で、そんな時は volunteer です。行かなくても良かったんです。向こうへ行ったら fence もない guard も無い自由だから volunteer しなさいって。うそだった。やはり fence もあったし guard もあったんです。
- TH: そこで日にちは分らないんですが本土はどこへ？
- HK: 行ったのがね convoy、貨物船。ハワイに皆物資持ってくるでしょう。戦争なので。貨物船が確か全部で7隻とか聞いたけど。で演習しながら、target を高射砲でポコポコやりながら。貨物船だから何ていうか豪華なものじゃないですよ。僕らが見ても危ないからあっち行けとか言わないの。ポコポコ撃ったら shell が飛んでくるの。一週間ぐらいかけてジグザグで行きました。潜水艦にやられたらいけんから。
- TH: で、何処に着きました？
- HK: それから Golden Gate Bridge の下を通って San Francisco に着いて、それから Oakland に行って、それからそこから汽車に乗って。あの頃は汽車ですよ。石炭の。汽車に乗って、table があってとても良かったんですよ。そうしたら waiter がするでしょ。それで皿持ってきて、今度は tip くれって。ところが皆取り上げられてるでしょ。一銭もないんですよ。なんにもない。Tip をやらないもんだからもう怒ってね。次からは濁った飲み水、それから食べ物もラムのシチュウかなんかで皆腹下して。トイレが両方にあったかな。酷い目にあったですよ。4日ぐらいかかって Topaz, Utah, Salt Lake から 100 マイルの所、で砂漠の中にバラックがある。(註: 1943年3月14日に到着)
- TH: その時は一緒に行かれた方、ハワイから行かれた方、何人くらいおられたのでしょうか？
- HK: さあ、それがはっきり分らないがとにかく 200 人近くおったんじゃないかね。で、Utah の Topaz のバラックが一つ空いていたのね。僕らの為に空けてあったんでしょうね。バラックがほとんど一杯になったんじゃないかな。もう砂ぼこりで、風呂は土の埃で。モップかけよったがとにかくひどい何だったけど。暇に任せて綺麗に clean して。Kitchen の helper とか仕事もして。それから fireman の仕事もして。それから garbage truck も、garbage collector もして。
- TH: Topaz はハワイの人だけでなく Mainland の人も家族で来てましたね。
- HK: だから 5 千人と聞いたけど後から、又随分増えたんじゃないかと思います。
- TH: そういう他の所から来られた人達とはお話しするチャンスとかありましたか？
- HK: 他の所から来た人でシロマツさんで確か Los Angeles あたりから来られたんじゃないかね。夫婦の方がね。あっちによく遊びに行ったし。タマナハさん言う人もいたし。

- TH: 別のブロックに住んでいて往復が自由に出来るのですか？
- HK: そうそう。あのちょっと一つの町ですよ。夜になると演芸会。とても歌の上手な人が沢山いたんですよ。Musician も Doctor もいたし。いろいろな職業の人がいたからね。Baseball も。
- TH: 野球が有名ですよ。Topaz は。
- HK: ええ。(写真をみせて) これ Topaz の Waikiki チーム。
- TH: ハワイのチームですね。これには金城さんは写っていますか。どこですか？
- HK: はい。これ。
- TH: はあ。似てますね。毎日のように野球をなされて。
- HK: 僕はあまり Topaz では。Tule Lake ではちょっとやったけど。
- TH: これは野球ですか、ソフトボールですか？
- HK: No, hardball。野球です。と思います。僕は余り知らない。
- TH: この時はいろんなキャンプのなかの仕事をやって、暇な時に皆が集まってやると。
- HK: 仕事いったってちょっとだけ。朝の一時間。Garbage collection は一時間ぐらいで済んじゃうから。で、Topaz で fireman。Fireman は fire station に行つて 24 時間したら散歩に行つて。3 日休んで。そんな事を。
- TH: 当然火事は無かった。
- HK: 火事は無かった。時々 drill をやるんでね。
- TH: それはかなり楽な仕事でしたね。
- HK: だから将棋、碁、それから、Horse shoe とかあんなのやってたです。
- TH: 一般的にいうと Topaz での生活と言うのはすごく厳しかったとかいう事ではなく比較的自由に暮らせた。
- HK: 自由に暮らせた。
- TH: 例えば食事とかの質はどうでしたか。
- HK: 沢山で良い。あの、ちょっと、自由ではないけど、病院があつてドクターに行つて、“ちょっと痛い”と言つたら、“血が溜まってるから取つたらいい。あまり硬いものばかり 食わせるからだよ”。そんな事言つたけど。そんなに硬い物だったとは思つてないけど。かえつてホノルルに居た時よりは、あまり急に食べなかつたですよ。
(ここから少しハワイの話になる) どっか一週間にいっぺん休みの時、といつても、8 時間仕事してからの休みなんです。7 days a week, 12 hours a day, で一日だけ day off。それから 6 時から 2 時まで、朝の休みね。そんなだった。日本食が欲しいと東洋劇場つてあつたの分りますかね。東洋劇場の前で「めざまし」、そこで日本食を食べたんです。であまり肉食は贅沢に食べなかつたですよ。
体もあまり強くなかつたからね。でキャンプに入ると食べ放題ですよ。
- TH: そういう意味では逆に恵まれましたね。
- HK: (笑い) だから食べ物とか時間が自由ね。だから絵を習つたり仕事を習つたり。
- TH: 相当余暇の仕事で忙しかつたですね。
アメリカの所謂キャンプの責任者なんかはあまり煩い事は言わなかつたんですか？
- HK: 煩い事は聞いたことは無いです。
- TH: そうすると internee の人もかなり平和的に暮らしていたという。
- HK: Block Manager がいて、何もこうしちゃいけないとかは聞いたこと無かつたですね。

- TH: そうですね。それで Topaz にはどの位滞在されましたか。
- HK: それが分らないんだけど。全然覚えてないんですね。僕はどうも日にちには無神経で。
- TH: そうすると時間はさておいて、その次は何処にいかれましたか？
- HK: Tule Lake.
- TH: Tule Lake.
- HK: Tule Lake に行ったのは 27 条と 28 条（註：27 項と 28 項）の No、no で。あれ分りますか。
27 条の 28 条で兵隊に行きますか。天皇陛下に弓引きますか。
- TH: Loyalty questionnaire ですね。あれを No, no とお書きになった。
- HK: No, no で Tule Lake に送られた訳です。僕が送られた頃は 8 千人ぐらいと聞いたけれど、今聞いていると 1 万 6 千人だとか言う話ですね。
- TH: Topaz から Tule Lake はやはり汽車で？
- HK: 汽車。
- TH: 汽車。何日位かかったか覚えていますか？
- HK: それが覚えてない。
- TH: その時 Topaz から Tule Lake にもかなり一緒に沢山の人がいたんでしょうね。
- HK: そう。沢山行ってますね。（註：1466 名）
- TH: 汽車の中はやはり同じ様に waiter でお食事がでたんですか？
- HK: さあ、どうして僕は覚えてないんだろうね。
- TH: 恐らくあまり待遇が良すぎて覚えてないんじゃないですか。
- HK: あの汽車の中はそう待遇悪くなかったですよ。始めて Oakland から乗った時はもう待遇も皆酷い目にあったからね。まあそんなに良い待遇ではなかったと思います。
- TH: それで Tule Lake に行かれた時にそこには既にハワイからの internee がたくさん。。
- HK: ハワイからの居なかったと思います。Mainland の方達。
- TH: そうすると金城さんが入って来て他の所からも皆来たと言うような感じですか。
ちょうどですね Arkansas 州の Jerome という所に収容所がありましてね、そこが 1944 年に閉鎖するんです。それでそのときに日本に帰りたいと言う人とか、さきほどの No, no グループの人達は凡て Tule Lake に送られるのですね。それでかなり沢山の人が Tule Lake に行ってるのですが
- HK: そう。あちこちから。方々のキャンプから行ってますよ。
- TH: その頃に Tule Lake 時代で覚えていらっしゃるハワイからの人の名前はいかがでしょう。
- HK: 沢山ありますよ。
- TH: 本田さんもそうですね。
- HK: 本田、僕のルームだけでも、かんだ、かわの、かわのさんは強盗に入られて亡くなったと聞いた事あります。それから、かねいし、
- TH: おざきさんてご存知ですか？
- HK: おざき。
- TH: 音吉さんて。
- HK: あまり会ってない。有名ですよ。
- TH: それでその中に本田さんも居られた。
- HK: 本田さんは家から近かったです。
- TH: 本田さんの事については別に伺いますので。

Tule Lake は Topaz と比べると待遇はどうでした？

HK: 皆何か complain があったみたいですね。僕は小さいときから贅沢してないから何でもとても豊かだと思いますよ。誰も complain してなかったがね。ちょっと過激派みたいなのがいて彼らが 不満をまきちらしていたんじゃないかと思いますよ。

TH: かなり Tule Lake というとすぐ過激派の話が出てくるぐらい大変だったみたいですね。終戦間際なんかかなりいろいろな混乱があって一部の人が Santa Fe とか Bismarck とかに動かされているんですね。その辺の騒ぎかなんかをご覧になった訳ですか？

HK: 御覧になったじゃなくてね、自分もやられたんです。食糧が外から来ると military の倉庫が在って。夜中に倉庫を開けてキャンプの人の食べ物をこっそり盗んでいく。それをいつも見てるわけよ。それで fence のところへ行って大騒ぎを起した訳。そしたらその中にハワイから Mainland に行くときに military の overcoat を支給されたんです。それを着ている人がいた訳です。ハワイの者が騒動起したんだってな事で夜中にドアをノックするから開けたらね、銀色に光るピストルを胸に突きつけて兵隊が 3 人かな拳銃もって立っていて、toilet article 持ってジープに乗んなさい。乗ったら stockade に連れて行って。それが確か 11 月頃じゃなかったかね。雪がふっていたから。雪の降る中を camp の stockade の、バラックは同じ様なバラックだけど、そこに連れて行かれて始めはテントの中、後からバラックに入れられて。やはり過激派のリーダー達が事毎に反抗するものだから military がバツバツと入って来て“お前達外へ出ろ”、それで雪の中に 3 時間位立たされて。そしたら今度は誰かが“ハンガーストライキしよう”と hunger strike に入った。それで I think, 6 日 18 食位ね、7 日、一週間位断食して。それでリーダー達がガーリックを焼いて食べるのをルームメイトの人達が見てこいつらは何時までもなにが出来る。Hunger strike をやっている内にリーダー達が食べているのが分ったので河野さんと言う方が僕の roommate だったんですね、彼が“あいつらは食べてるじゃないか。こちらはギニピッグにされているんだからやめちゃおう。ついて来るやつがいればついて来なさい。食べたい人は食べなさい。食べたくない人は食べない”。で、リーダー達の所へ行って“止めよう”。そしたら“お前達がやめるんだったら意味がないから皆な止めましょう”。という事で皆やめたんです。それで間もなくして出してくれたんです。それから今度リーダーの人達、何人かは知らんけど又始めた。彼らは出して貰えなかったの。だから又今度は二週間ぐらいやってみてくださいね。どう決着つけたかは聞いてないけどそういう話聞きました。

TH: ということは Tule Lake はもちろんそうじゃない部分の方達も沢山おられたと思うのですが反米的なムードがあってそこでいろいろな騒ぎがあってそれが反米的でない人も巻き込まれてしまったというような部分が相当あるんですね。

HK: あります。あります。

TH: そうするとその方達はそこで結局戦争が終わる訳でしょう。その時はそういう方達はどのような行動を取ったのですか？

HK: まだ日本が負けたって思っていない人も相当いたみたいでね。で、僕達はそんなに。。。とにかく鉢巻してわっしょいわっしょいやってるのを見たことはあるけど、僕の所はキャンプの端の方だったからね。真ん中の方のことは余り分らなかったけれど。

TH: という事はキャンプ中が大騒ぎになったという事じゃなくて、ほんとに一部のところで大騒ぎになっているけど、他の所では静かだったという事もあるわけですか。

HK: で、さあいざこうなったら市民権を捨てた人達は後悔するね。僕なんかそうなんですよ。

TH: 何時ごろ市民権を捨てられました？

HK: それも覚えてないけどね。

TH: Tule Lake ですか？

HK: Tule Lake で。皆が捨てるから。日本へ帰ったら市民権捨ててないとお前ら悪く言われるゆう事で皆につられて捨てたんだけど、やっぱり済んでみるとハワイに帰りたいし、日本は負けてるし、日本に帰ったで大変だから、市民権を戻してもらおう。そのときに戻してもらうよう弁護士さんに頼んでそういう運動していたからね。で一人200ドル金だして弁護士 Wayne Collins だったかね。彼が取り扱ってくれて。どうかなあ、裁判の事は。。

TH: それは戦後ですね。

HK: 戦後ね。それで皆、市民権捨てなかった人、それから一世、市民権が無いから捨てないですよ。そういう人は皆出て行った。市民権を捨てた人はずっとリリースが来ないで。おもしろいよ。うちのブロック50番ね。そこにメスホールがあってキッチンに食糧持って来るんですよ。そしたらね200人居るときも50人居るときも同じ様に持ってくるんですよ。“これ要らないから持って帰りなさい”。“ノー、わしゃ持ってくるのが duty だから”。日本は食べないで。アメリカはまだ食糧が豊富で。ミルク。Ten gallon かな。いや、five gallon。あれを4つも持って来るんですよ。飲めないですよ。風呂おけに。ミルクバス。(笑い)

TH: 大変な思い出ですね。

HK: であの。羊も一頭持って来るんですよ。日本人は羊はあまり食べないですよ。においが慣れてないから食べない。一頭持ってきて如何してよいか分らんからストーブに。良く燃えるんですよ。油があるから。肌もミルクで洗うと綺麗になるよ。あんな事もした。(笑い)

TH: その時は Tule Lake のキッチンの方で働いていられた訳ですか？

HK: そうそう。 サービスとか皿洗ったりね。

TH: それは前のお仕事があるからエキスパートですね。

HK: でも僕は cook はさせて貰えなかった。First cook と second cook は小遣い、手間があるのでね。19ドル75セント、それから3ドル75センか。月給がある。僕らは16ドル75セント。それに3ドル。だから3ドルぐらいかな。Chief cook は。僕らはそんなに責任持ってやるのじゃないから。責任持ってやるほどの事でもなかったけど。Tule Lake でも baseball とか柔道、絵のなにをやりました。

TH: 今絵のお話ができましたけど、その時先生が本田広志さんと言う方だったと思いますが。その辺のお話を伺いたいと思いますけど。本田さんとは絵のクラスで始めてお会いになったのですか？

HK: 彼はとても綺麗な絵をかくんですよ。もうすごい絵をかくのね。展示会があつて High School の講堂でもう皆の注目は彼の絵に集まって。外からもその時は入ってきて。仕事人かも知れんかもしれないけど、白人の人達がね。あまり綺麗な絵を描くから僕は惚れこんじゃってクラスを。。

TH: どのぐらいの例えば週一回とか毎日とか。どの位の頻度でクラスがあつたのですか？

HK: 確か毎日じゃなかったかな。

TH: 毎日ですか。じゃあもう仕事みたいなものですね。

HK: 朝だけです。僕の場合は。

TH: じゃあ本田さんものすごく忙しかった訳ですね。何人ぐらい生徒がいましたか？

- HK: とにかくゆったりしてました。桜の柱とか。何処から持ってきたか知らんが。綺麗なもので。床の間で。クラスで床の間作って。丁度あれが済む頃に戦争が終わっちゃって。
- TH: 何人ぐらい生徒さんいましたか？
- HK: そんなにはいなかったと思うけど。10人おったかな。
- TH: そんな感じですね。
- HK: ゆったりしてました。
- TH: 本田さんというのは東京の美術学校かなにかお出になった。。
- HK: 京都の。
- TH: あ、京都の。
- HK: 厳しい人でね。僕は先生が手直しするとね、ここがいけないと、ちょっと、こわごわでやるからね。“お前こんな心で絵を描くな！”って。白い dress shirt の腕を両方持って。ピーと破っちゃって。“お前がつまらんから破っちゃうんだ！”
- TH: 本田さんは日本で陸軍に入って、航空隊ですよ。それで相当日支事変で手柄をあげて、一説によるとその時の手柄話がハワイに伝わって日布時事で記事に載ったらしいんですね。その為に FBI がブラックリストをした。だからその話が伝わってなければ、本田さんはインターンされなかったという説があるんです。
- HK: とにかく彼は、でも僕にはとても良くしてくれて。時々スケッチに、“秀夫、行くか？”と言って、スケッチに誰も連れて行かない。僕一人連れていってくれて。
- TH: 恐らく年が10近く離れてたんじゃないですか。金城さんと本田さんは。
- HK: そうでしょうね。
- TH: それで、本田さんはその時はご家族はおられたのでしょうか？
- HK: そう。子供が生まれて。ひらいさんという方が、僕は glass & art に居て。(Hawaii Glass & Art) おだやすたろう知ってますか？ 彼の所で働いていたんですね。ひらいさんが彼に本田さん結婚ばかりして。ひらいさんも入っていた。隣だからね。
- TH: ひらいさんて二人ぐらいいた。。
- HK: りゅうぞうか。
- TH: りゅうぞうさん。(註: 平井隆三) 後の新聞記者になれるかたですね。
- HK: 確かキャンプ入っていたんですね。隣でよく夫婦喧嘩して。
- TH: 本田さん自身は終戦になって New York へ行かれるんですね。そのときに金城さんが一緒に行こうと言われたのですか？
- HK: 僕は行きます言っというて行けなかった訳です。市民権何してるから。でも行きたい気はなかったですね。
- TH: 本田さんは New York に行きたかった最大の理由と言うのはやはり絵を習いたいという事ですか？
- HK: そうでしょう。絵が彼のなんですからね。亡くなってから彼の家族が展示会をやって。本を見ましたか？
- TH: カタログラインですか？
- HK: 彼の(絵を)見に行ったんですよ。Academy of Arts。そしたら、絵が全然違うからね。New York 行ってから、これは同姓同名異人だと思ってずっと奥の方行ってみたら昔の Tule Lake 時代の絵があって、別人と違う、彼の絵は New York 行ってから、ホノルル帰ってきてからも絵はもう全然違う。Tule Lake 時代の絵はちょっと物足りない。

- 硬さがね。New York 行ってからぐっと全然違う。違う人が描いたみたい。
- TH: 確か New York でくによしやすおさんという有名な人に習ってそれで画風が変わったのだと思いますね。それで Edward さん。Ed 本田さんの middle name はくによしです。
- HK: おう！
- TH: 恐らくそのくによしさんから名前をとったんでしょう。
- HK: 力が入ってるのね。違う。
- TH: キャンプの中で絵をお描きになる時の絵の材料、例えばキャンバスとか絵の具とかそういうものは自由に手に入ったのですか？
- HK: Mail order. 外の。Colorado あたり。Mail order で。僕は靴を。靴をね。僕のサイズ。Size 5 をオーダーしたら。こんなの合うの無いから 2 ドル 50 センぐらい出したら足の型とって送ったら送ってやるから。で、幾ら位だったかな？ 14 ドルぐらいかな。いまだに確かあると思うよ。(shoe box を見に行く) ああ、もうないか。Florsheim。
- TH: Florsheim は高級な靴で。
- HK: それで足に合わせて作って貰ったから崩れないんですよ。もう、70年。ずっと履いた訳じゃないけど、時々。履いたから。
- TH: かなり自由に canteen かなんかを通じてオーダー出来た訳ですね。
- HK: そう。オーダー出来た。
- TH: そうですか。
- HK: それからある者は米ですか。酒造ってた。こうじ使って。
- TH: それは密造酒でしょ。
- HK: 僕らも買って飲んだ事ある。
- TH: あの、キャンプの中でビールなんか売ってなかったんですか？
- HK: それは無かった。
- TH: Tule Lake はやはりかなり厳しいのですね。他のキャンプはビールが買えたんですよ。
- HK: ええ。僕は Crystal City あっちではビール買えた。週に一人あて二本。だけど飲まない人がいるでしょ。キューポン貰って僕は one case 飲みよったですよ。
- TH: それで、Tule Lake で終戦になるわけですけど、終戦の日の事はどんな記憶を持っていらっしゃいますか？
- HK: ラジオのショートウェーブ隠して。そんなに厳しくなかったね。玉音放送を聴きました。皆がもう、でも日本が負けるのはたいがい分っていた。Because 竹やりをもってたち向かうとか。最後の一人まで戦うとか言ってたから。もう日本は駄目だと思っていたからね。でも shock でしたよね。玉音放送なんか聴いてね。
- TH: これで日本はなくなっちゃうじゃないかなんて思ったりされました？
- HK: そうですね。
- TH: その時にはもう金城さんは国籍を放棄されていたわけですよね。
- HK: 放棄しているから、キャンプから出して貰えなかった。とにかくそれから市民権を戻してもらおう。そういう方達が世話してくれて、弁護士 Wayne Collins ですよ。
- TH: Tule Lake は何時ごろまで。終戦の後暫くおられたわけですね。何時ごろまでおられたか覚えていらっしゃいますか？
- HK: 全然分かりません。

- TH: 1 1月ぐらいに日本人の方はハワイに戻ってますよね。その辺出発なんか見送られた記憶がありますか？
- HK: 出発は写真があったけどね。何処いったかわからんけど。自分では出発へは行ってないけど。写真がたしかあった。見たことあります。
- TH: 終戦後のキャンプの中の生活と言うのはもちろん反米的な人は静かになったと思いますけど。キャンプでの終戦後の生活というのは非常に平和だったのですか。
- HK: そうですね。可哀想なのは犬、猫。おいていかれてね。僕も犬を飼ってたけど。どうしようもない。 つれて行くわけに行かない。そのまま置いてきたけどね。でも。
- TH: じゃあ猫や犬が野良犬、野良猫になってしまったわけですか。それで、Tule Lake で終戦を迎えられてしばらくして何処に行かれました。
- HK: Texas ですね。Crystal City といって、San Antonio の近くで。Crystal City へ入る道にポパイの銅像がありました。
- TH: それは覚えていらっしゃるんですね。
- HK: そして Crystal City にはね。半分はドイツの人、半分は日本人。その中に南米、アルゼンチンあたりからの人も、インド人も2,3いたみたい。南米からの女の子、16歳で子供が3人、そんなのがおって。僕らの日本人サイドには swimming pool があった。だからドイツ人なんかはこちらへきた。僕は仕事をドライバーの、Utah ではトラックにやらせる仕事があったけど、ここでは、ドライバーの仕事。ドライブした事なかったけど、全然。ダンプトラックなんですよ。わしも、こう。。。(運転の振りをする) (笑い) Rubbish を取ったらガウチ(註: gulch) にこぼしに行くわけ。ずうーとガウチのへりまで車をなににして。でも誰もガイドしてくれる人が無いからこわいですよ。ウオッチしている人が“もっとしないか back を!”。(笑い) でもあの時は無鉄砲だったですね。
- TH: まだお若いから。同じ様に Tule Lake から Crystal City は相当の方が国籍を放棄してるから一緒に行かれてる訳ですよ。皆さんかなり数がいましたか？
- HK: ええ。小さいバラックで、ひとつのバラックに5人ぐらいで。さあ、いくつだったかね。だいたいあったみたいですよ。
- TH: 皆、Tule Lake から来た人達はかたまっで住んでらした訳ですね。
- HK: そうでもない。
- TH: そうでもない。
- HK: あちこちからの。。。
- TH: その時は金城さんはまだお一人でしょ。中には家族連れもおられたんではないですか？
- HK: そうですね。だけど家族連れはおいてないですね。
- TH: ああそうですか。もしかしたら別行動になったのかな。それで Crystal City にとりあえずは移動してそこで又何処かに行かれましたか？
- HK: それがね。 Crystal City に居りたかったら居っても良い。それで release がきたら政府が全部ハワイまで、何処へでも払ってくれる。しかし今 release の前に Seabrook Farm に働いたらそこからは自分で帰りなさい。僕はもうあんなキャンプにいるのは飽きてるからね。自分で払っても良いから働きます。Seabrook Farm で働きたい。
- TH: Seabrook Farm に行かれたのはかなりいました？ 仲間が？
- HK: だいたい行きましたね。始めは State Park のバラックに入って、だから Tule Lake からの group はそんなに居なかったと思います。

- TH: そうですね。誰か一緒に行った人の名前を覚えてますか？
- HK: 玉城言う人がいたね。それから金城言う人がいた。それから。。。
- TH: 後でまた思い出したら教えてください。Seabrook Farm は確か New Jersey ですよ。Crystal City から皆自由に汽車に乗って行かれたんですか。
- HK: 自由に行ったんでなくてやっぱり。ええとどういったかな。とにかく団体で行ったと思いますよ。
- TH: グループでね。
- HK: グループで。
- TH: それで、Seabrook Farm は缶詰というか冷凍食品みたいなものを作っていたと聞いてますが。
- HK: そうそう。
- TH: お仕事はどんな。
- HK: 始めはコンベアで豆とか野菜のなを、土やゴミが混ざってるから。それを取り除ける仕事です。あまり良い仕事じゃないわね。でもずっともうアメリカだから。である日誰かトラックのドライバーの人が来て、“お前こっち来なさい”。二人、一人は Mainland の人で僕と二人。外の仕事、トラックの helper。始めは工場から流れる水のゴミをとる。で今度は Seabrook Farm の社長。社長の邸宅の外に church がある。社長が使用する church。そこの maintenance の仕事。遊んでるようなもの。Seabrook は 16 マイル以内より外へ行っちゃいけない。でも誰も見てる人はいないから。Atlantic City へ。僕も行ったけどね。冬だったから何にもなかったけどね。それから Vineland いう町へ。4, 5 人で遊びに行っただすね。バーへ行って、酒をだして。三杯飲んだら後は次は free とか。大きな sidewalk ですよ。わしら 5 人こう歩いて行って。若い白人の女の子がすれ違うね。“Japanese” (さきやく) とね。日本人が珍しいの。キャンプには日本人いたけど、街では珍しいのね。Vineland は 30 マイル位で taxi で皆で割り勘で行って。
- TH: 給料はどのくらいだったんですか。
- HK: 良く覚えてないけど、黒人は同じ仕事しても 67 銭 5 厘、日本人は 72 銭 5 厘、白人は確か 85 銭位だったかな。とにかく同じ仕事しても人種別で。手間が違いよった。あんな時代だったんですよ。
- TH: もう人種差別ですね。あの頃は。
- HK: それが当たり前だったんですよ。
- TH: なにか記憶に残るようなエピソードはありますか？ その Seabrook Farm のお仕事で。
- HK: 嵐のときに仕事いったらもう仕事できないから、仕事出来ないキッチンが開かないね。それでどのぐらいしてか、確かスープとサンドイッチを作ってそれを食べた思い出がある。11 月ごろだったかね。だから Mainland は嵐があると仕事は、farm の仕事だからね。だから会社 close。で会社で確か仕事場での dining は只だったと思いますよ。並んでね。メスホールのようにね。一人の女の子が“あんた何処かで見たことある”と言ってね、“あんた知らないよ”あんな所で、ハワイからだし。こっちは離れたの。で又次にあそこに座って ご飯を沢山ついでくれるわけよ。おかしいなと思ったら向こうの人は友達になりたい時はそう言うという事が、それは Vineland に行った時に始めて分ったんですよ。Waitress が、上原言う、僕の遠戚に当る人が、彼はとてもハンサムなんだよね。あまりハンサムだから白人の人でも “I saw you someplace” と言うから、ああこれが常套手段だという事が分った。それで彼はまた分っていたかどうか知らんけど “I saw you at caw

pasture”とかなんとか。

TH: 相当もてましたね。

HK: もててたの。Tule Lake ではね。僕は office manager のオフィスギョール、日本育ち、和歌山育ちで。Los Angeles かね。前に育って、日英両語で講習で編み物かなんかそういったものが上手で友達になって、僕マンダリン弾きよったから。彼女にマンダリンも教えて。親しくしてたんだけど。この上原君が来たらもう僕なんかもてない。(笑い) 全然もてない。(笑い)

TH: 上には上がありますね。それで Seabrook Farm はどのぐらいおられました？

HK: 半年ぐらい居たかね。

TH: 半年。

HK: 僕も全然覚えていないけどね。

TH: それでその後はホノルルに戻って来られたのですね。

HK: それがね、汽車を、Philadelphia から汽車に乗るんですよ。Philadelphia から Chicago に行って、Chicago から又 Los Angeles 行きの汽車に乗る。で Philadelphia

で“何処へ乗ったら良いかと” いったら、始めに切符買うのに、Los Angeles までの切符を、

Northern Pacific, Central Pacific, Southern Pacific、three ある。“Which is best?”

“They are all best”。そういうからじゃいにみにまにも Southern Pacific にした。

それで途中駅に停まるでしょ。そしたらね、便所のサイン、Black, White。確か

Black, White と思うよ。Color かどっちか分らんが。忘れた。とにかく黒人と白人の

便所が違う。それでずっと南の方へ。Southern Pacific だからね。Los Angeles より

南だとは思っていたけど、Mexico まで入って行くわけよね。そしたら国境ですよ。

こっちは市民権捨てて、ない。Alien Registration 見せたらお前移民局へ来い。わしは

もう Los Angeles から Hawaii に帰るんだからこれ miss したら又飛行機でも何もかも

全部駄目になっちゃうからどうかしてくれ。移民局の上の人と相談したんでしょう。

“OK, ok”。此処を通過して Los Angeles 行くんだから。

TH: その時はまだ国籍が戻ってない。

HK: Alien Registration だけ。

TH: だけだったんですね。

HK: Alien になっちゃってた。

TH: それでホノルルに戻って来られたのが何年ぐらいですか？

HK: 確か Nineteen Forty Seven だったと思います。。

TH: じゃあ、大体二年近くたっていた。戦争が終わってから。

それでハワイではどこにお住みになったんですか？

HK: ハワイではカカアコ。

TH: ホノルルのカカアコですか？

HK: そう。さっきのどこいったかな。(何か探している)

TH: はい、これですね。(新聞記事を見て) 出てますね。 分りました。

それで、その時はまだ独身だった訳ですね。何時ご結婚されたのですか？

HK: Nineteen Sixty ですね。

TH: 奥様は昔からご存知の方ですか？

HK: いやいや。帰ってきてから絵の会があって。クラブがあって。そこに島袋さんという方がいて。

お前まだ奥さんいないなら紹介してあげる。彼の紹介で。妻は叔父が沖縄から呼び寄せて裁縫の学生として。学生ビザで来てたんですね。

TH: じゃあ奥さんも沖縄で生まれ育っていらっしやる訳ですね。

HK: 生まれは台湾。

TH: ああ、台湾ですか。それで沖縄で育って。

HK: 確か6つくらいの時に沖縄は戦争が終わって。

TH: それでハワイではその時はお仕事はどんな様な事をなされたのですか？

HK: レストランのコックですね。

TH: それでコックをしばらくされて、最終的には Pan Am にお勤めになる訳ですか？

HK: そう。コックをしているときにうちの叔母が Pan Am の広告が出てから。Australia から（飛行便が）下りて来る。

TH: ああ。Melbourne.

HK: 便を増やすから temporary で雇うんだが。お前あちこちでちっこくやってるからあんな良い仕事何して。こっちが又 temporary だから又仕事変えるのも難しいから“良いのか？”というから“うん。まあ cook の仕事いくらでもあるから大丈夫です”。で temporary で入った。それが 27 年。

TH: あっという間に過ぎちゃいましたね。

HK: そうなんですよ。人生も。90 歳になっちゃった。(笑い) いつの間にか。

TH: それで、今からお考えになると金城さんにとって抑留というのはどんなものだったのでしょうか。

HK: まあ、とっても挫折ですよ。精神的にもとてもつらかったですよね。平静の暮らしは友達も沢山できて、baseball もやって、だから勉強にはなったんじゃないかと思えますね。ちょっと遅れるには遅れたんですよ。友達も、女の友達もできたし、沢山居たし、世間を、人々を見るにも、普通の仕事をしている時とは全く違う環境だったからね。良かった事とちょっと遅れた。帰って来ても英語分らないし、それなりの資格もないから、Hawaiian Mission (Academy) に apply して、3 年生くらいに入れてくれて、英語分らないから。試験取りなさいと。試験とったら英語は分らなくても、数学なんかは分るから、お前 7 年生入りなさい。Special English(の class)があるのが分らなかつたんですよ。だから(7 年生というのは) 12 歳の頃ですよ。だから 7 年生をとばして 9 年生に入った感じ。9 年生は high school。Freshman。

TH: 学校はどこでした？

HK: Hawaiian Mission Academy. 普通は 9 年生は intermediate です。あっちは high school になってる。仕事しながらだからね。辛いよバイブルが必須科目で。だから(Hawaiian Mission はやめて) 昼の仕事もらって、絵描きの仕事(Hawaii Glass & Art)、夜は英語、Mckinley High School に two nights。

TH: 金城さんというとすぐ絵の事を思い出してしまうんですが。本田さんに非常に影響をされて絵をずっと習ってらったという事だと思いますが

HK: でもね、ちょっとですよ。始めて何か、もう戦争終わっちゃって、camp を出て別れてしまったので。ですから、ちょっとですよ。

TH: ハワイにもどってこられて又絵をお描きになりだしたのは何時ごろからなんですか？

HK: Christmas card をね。あれを一枚一枚描いていたんですよ。今はもう copy machine

やってるけど。一枚一枚。忘れない為にね。たしか 30 年ほどになるかね。毎年。

Christmas card を描いているんですよ。

TH: そうすると毎年新作が出るわけですね。

HK: これは（絵を指して）うちの叔父の盆栽なんですよ。これを Washington D.C. の National Arboretum においてあるんですよ。友達が写真とってきてその写真から描いたんですよ。あれは Makaha side で。一応見ますか？ そんなにないから。

TH: これは雪舟なんかの山水画の感じですね。

（この後はお家に掛けてある金城さんの絵を拝見する）